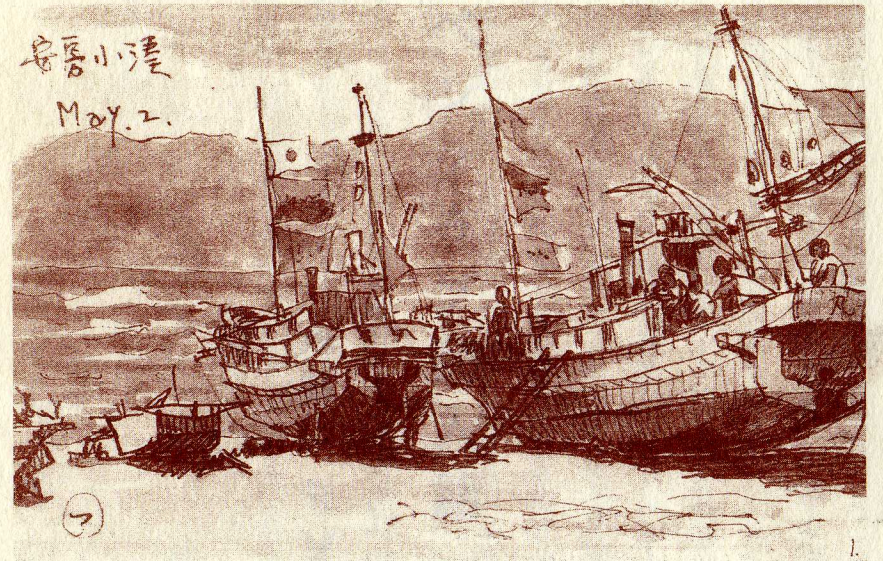


# 悠遊 創刊号



企業OBペンクラブ



## 刊行のことば

鳴澤 宏英

企業OBペンクラブの同人誌第一号が、会員各位の積極のご参加と、編集に当たられた方々の並々ならぬご尽力により、このたび上梓の運びとなりました。

名称の「悠遊」は、熟年（シルバー・エイジ）世代の生き方、とくにその明るい側面を強調したもので、会の性格を象徴する適切な命名であったと存じます。

もともと「国際ペン（PEN）クラブ」等に冠せられたPENの語は、周知のごとく、POET（詩人）、ESSAYIST（随筆家）、NOVELIST（小説家）のそれぞれ頭文字をとった頭字語（Acronym）つまりペン・クラブは、文筆を業とする専門家を意味するものでありました。

これに対して、当クラブは、同じ名称を使いながら、海外勤務を含む長年にわたるビジネス活動を通じて、多面的な知識、経験、ノウ・ハウを身につけた企業人のグループ。その意味で、文筆に関してはアマチュア集団であります。アマチュアの語を使いましたのは、何もプロに対して卑下したのではなく、アマチュアなるがゆえの特色と強みを強調したい、との思いを込めたものにほかなりません。

具体的に言えば、会員の共有する業際的な幅広い資産を活かし、チーム・プレーによる知的生産活動を

推進することが、当クラブの本領だと思っております。ここに、あくまでプロである会員各自の個人プレーを本旨とする集団との間の際立った違いがあるのではないのでしょうか。

このような基本性格を有する当クラブが、会員各位の自己表現ならびに会員相互の交流の場として、同人誌を持つことの意味は、ことのほか大きいと考える次第であります。

しかも「悠遊」第一号の内容は、多彩かつ豊富、最初の試みとしては、十分評価できる出来栄のものとなりました。会員の皆様とともに喜びを分かち合いたいと存じます。

今後、この同人誌が、当クラブの求心力と活力を高めるよすがとなり、また、より実りある知的生産活動への励みないし刺激剤となることを念じてやみません。

さらに、「悠遊」に盛り込まれた私どものメッセージが、当クラブの対外PR活動の一翼を担うとともに、会員層の拡大への弾みとなることを心から期待する次第であります。

（企業OBペンクラブ会長）

目次

◇刊行のことば……………鳴澤 宏英

◇路のとう……………浅野 正春 6

◇ある晩のこと……………栄子・アブルカーダー 7

◇油絵に魅せられて……………新井 進 9

◇一本の掛け軸……………池田 善行 11

◇幻におわった談志の寄席……………石井 正紀 13

◇不寝番……………石川 正達 17

◇『頑張らない』すすめ……………伊庭 継也 19

◇マロニエの葉……………岩瀬 昭三 23

◇『世界遺産』指定に思う……………遠藤 俊也 25

◇国際マナー編の落第生より……………角谷 朗宏 28

◇英知結集に腰をすえる時……………上沢 準一 31

◇わが青春の一コマ……………亀井 弘次 35

◇社交術教育の必要性……………北田 純一 36

◇ガン告知……………木村 親 41

◇稽古場は役者の道場……………きりん たかし 45

◇ペンペン桜……………小林 正憲 47

◇忘れ難い人……………三枝 亨 50

◇北の王国……………斉藤 勤 54

◇急激に変化するOA機器……………佐份利 治 57

◇五倫文庫を訪ねて……………竹内 京一 59

◇アウトドアで自然と親しむ……………田中 良平 63

◇正月ラクビー随想……………中川路 明 66

◇寂しい街の怖い話……………中野 隆夫 67

◇日本人の名前……………鳴澤 宏英 71

◇父の国の恋人……………西島 力 75

◇「こめ」とベトナム……………野村 嘉彦 77

◇まだはもうなり……………福井 峻 79

◇ある戦友へ……………藤井 長治 82

◇遊休能力……………藤岡 豊 86

◇シャルロットの跡を訪ねて……………丸山 暢謙 88

◇往事漫筆……………水谷 汎 91

◇考え方の選択……………森田 茂 95

◇誰のための景気対策……………八木 大介 98

◇ある良医のつばやき……………吉葉 芳彦 101

◇悠遊の記……………小川 弘 104

許斐 義信 104

清水 喬 104

関谷 裕彦 104

中川 十郎 105

西川 知世 105

林 篤二 105

原 信 106

吉井米三郎 106

吉壽 清己 106

平間真木子 107

浅野 正春 107

石川 正達 107

亀井 弘次 107

北田 純一 107

◇一句鑑賞……………平間真木子 109

◇河村幸一郎さんを偲んで……………西島 力 112

見果てぬ夢を……………西島 力 112

河村幸一郎さんを悼む……………平間真木子 114

河村幸一郎さんと俳句……………櫻井 清治 115

◇年史・年表……………北田 純一 118

◇執筆者名簿……………北田 純一 135

◇編集後記……………西島 力 137

表紙の絵(安房小湊)……………西島 力 137

## 路のとう

浅野 正春

切り通しの道を抜けて

村境のコンクリの橋を渡って

右は溪谷に垂直に落ちる断崖で

左にはほんの少しばかりの草つきがあり

そのうしろには鬱蒼とした杉林がひろがる急な坂道を

先に歩いている親父の足どりを見つめながら登って行く。

春の信濃の山間の道の日陰には

まだ長靴の半分を埋める残雪が残っていて

親父の踏みあとを辿りながら懸命に山道を登る

ほてった顔を冷たい風が心地よくなぶり

背に負ったランドセルの中の筆箱の鉛筆が

歩くものを励ますようにカタカタと音をたてる。

親父の歩みがふと止まり、「あれをこらん」という声が

する。

親父の指差すほうをみると、

草つきの上のゆるやかな斜面の真中に

くろぐろとした小さな穴があいていて

そこだけはもう雪も溶けて黒い地肌が覗き

かすかに陽炎が立っているような幻覚にとらわれる。

その穴の真中に今生まれたばかりだともいいたいげに

仄かな若緑色の路のとうが生まれたての逞しい力で

周りの雪を溶かしてけなげにも外の世界を覗いている。

昭和十九年三月、私は父の生まれ故郷の長野県上水内郡小田切村字百瀬という山村に学童縁故疎開をすることになった。小学校五年生になる年のことだった。

戦争前には、国鉄長野駅のすぐ脇から「ガソリンカー」という軽便鉄道が、湯宿が一軒だけポツンとある山間の善光寺温泉というところまで乗せてくれたものだったが、戦争も激しくなり、その運転もとりやめとなり、やむを得ず父親に連れられて長野駅から約二里の道程を歩いて

行ったときの情景だ。

もう五十年前のことだが、第二次大戦中のことを思い出そうとすると、いつも真っ先にこの風景が目の前に現れる。

これはきっと私の戦争にまつわる多くの想い出のなかの原風景とも呼ぶべき景色なのだろう。

## ある晩のこと

栄子・アブドルカーター

昨年も、町の中学生たちを引率してオーストラリアのシドニーにホームステイしてきた。

これはそのときの話である。

シドニーに着いて翌々日だった。電話で、

——マーガレット先生の家に泊まっていたらしゃる栄子先生ですね。はじめまして。私、彼女の友人のダイ

アナです。実は、コンサートの券が一枚残っているんで、ぜひ明晩と一緒に、と思ひまして。

——ハイスクールの生徒たちが主催の、歌とダンスのコンサートで、私の娘も踊るし、マケラ校のバレエ部員も出演するんです。

——それから、その晩は、ぜひうちに泊まってください。終演時間が遅くなって、あなたのところまでお送りするのは距離的に無理ですし。

ね、パジャマだけ持って、ぜひ私の家に……。

まだ会ったこともない、いわば全く見知らぬヒトに、気さくに声を掛け合うオーストラリア人特有のおおらかさ。私はかなり疲れていたけれど、好意を受けることにした。

翌晩、会場の「エンタテイメント・センター」(シドニー最大の劇場)は、わが子や孫を一目見ようと集まった人々であふれかえっていた。なんと、ニュー・サウス・ウエルズ州の公立ハイスクールのうち、五十校余りが参加しての歌と踊りの祭典だそうなの。

さて、舞台装置、照明、オーケストラ、司会進行など、

けられてきたということだった。「競争」でなく、お互いの学校の生徒たちの「友好」こそが目的。

今年で十五年目をむかえた、とも聞いた。

スポーツであれ、学業であれ、何事においても、ヒトを押しよける競争、競争……。それも幼いころから。個性尊重どころか、他人への思いやりもへったくれもないどこかの国とは、何たる違いぞ。

見終わって、むらむらと、なさけないやら、腹立たしいやら。忘れられない晩ではあった。

## 油絵に魅せられて

新井進

元会社の美術部に入部したのがちょうど十五年前だったと記憶する。小学、中学を通じて絵画に興味を持ち、また描くことも大変好きだったことも記憶している。小

いっさいが学生の手で進められていく。しかもそれが、どうしてどうして、学生の仕事とは思えぬ玄人舞台で、まるで、かの有名な「フェイム」や「キャッツ」の本物を目の当たりにしているようなのだ。洗練された一つの技が見事なまとまりをみせ、ダイナミックで、若いエネルギーに満ち満ちていて……。

そして、何よりも驚いたこと。それは、プログラムの進行中、出場校の名前がたった一度もマイクを通して紹介されないことだった。

わずかに、ソロのシンガーやダンサーの名前と学校が紹介されるだけで。

つまり、出場校のそれぞれが舞台上で優劣を競い合うのではなく、一つの大きな作品の、ある場面を、各校が分担し合う——という試みではあった。

そのためには、各校から教師や代表の生徒が、忙しい合間をぬって、一カ所に集い、作品のテーマについて話し合う。次に、そのテーマに相応しい場面を学校ごとに創作し合う。最後に、それらを繋ぎ合わせるといった具合で、このような作業は、およそ半年以上にわたって続

学校では絶えず出品して金賞を何回も貰った。貰えばまた励みとなって、描くことの回数も他の生徒に比べて多くなり、賞状も分厚く部屋の片隅に高く積まれていたことも覚えてる。

あることがきっかけとなり、前述のように、美術(絵画)部に入部したのだが、長年間握ったことのない絵筆が、何とぞこちなかったことだったろう。

毎月二、三回、夜六時十五分から八時半まで指導を受けた。先生は日展会友、光風会審査員で、勿論、旧上野の美術学校を卒業し、その道、油絵を自分の人生と心がけて四十五年、堂々たる風格を持っている。人物が得意であり、それだけではなかなか売れ筋が少ないため、風景個展を年に二回程開催されている。

小生も、回を重ねるたびに、趣味を越えてセミプロの仲間入りと相成った。

というのは、還暦を迎えた年の春、群炎美術協会の会員許可を理事長より受けたからだ。その会は、旧美校の師範部OBが造った協会で、昭和三十七年(一九六二年)に発足し、今まで三十二年経過している。総会員数は約

三百五十名で、規模としては二科会（株式会社）と比べものにならない小グループである。

プロ、あるいはセミプロと称する団体に所属して三年がたつが、従来の会社とは異なった雰囲気で、何となくプライドがお高く、「going my way」を我が信条としているメンバーの多いことよ。自分の作品が、どの他の人の作品と比べものにならないくらい立派だと思っている。勿論、个性的で「ああ、この絵はあの先生の作品だ」と、特色のある絵はなんとなく好感がもてる。

退職してから、割と余暇ができたから、裏磐梯、尾瀬、佐渡、上高地、白馬、妙高、北アルプス、八ヶ岳など関東周辺を歩き、自然の豊かさ深さに接してきたが、このところ海のある風景が気に入っている。北陸東尋坊や銚子の犬吠埼など絶壁に波が砕ける迫力は何回描いてもあきがない。

昨年（平成五）春の群炎展で、図らずもミノイ賞をうけた。それは、福井県若狭の美浜を北上して五湖をこえ、半島の根っこに当たる漁港を訪問して、その自然と人工とが造りだした風景に魅せられ描いた作品だった。左右

### 一本の掛け軸

池田 善行

昨年の暮、宅配便で新潟から一本の掛け軸が私の手許に届いた。差出人を見ると、まったく心当たりがない。差出人の住所は新潟県西蒲原郡岩室村となっている。

大学の教え児たちの中にも、ゼミ生の中にも心当たりがない。私が学んだ学校の同窓会名簿の中にも、西蒲原郡というところに、縁のありそうなものはない。

掛け軸を開いてみると、漢詩で七言絶句が書いてある。私の友人の中で漢詩の素養のある者はいないから、まずは差出人の見当はつかなくなる。掛け軸の文字は白い紙の三分の二程のところに楷書で丁寧に書いてあり、下の三分の一程のところには、大きな海原とその海原を照らす真つ赤な太陽とが書いてある。全体としては品格のいい画である。

漢詩の句を眺めているうちに、面白い工夫がこらされ

と中央に突起があり、その先端にそれぞれ灯台が立ち漁船がにぎにぎしく往来していた。「ここはTVのドラマや、昔は映画のロケもきて、あまり他所では見掛けない景観を呈していますよ」との地元の人も話してくれた。

まだこの日本の中でも行っていない所も多く、出来るだけ足を運びたいと思っている。それでひと息ついたところで、十数年間行っていない欧州から米国へ行つてみたいと考えている。本当に空気が乾燥していて緑が美しいフランスやドイツは、やはり憧れの的である。昨年夏のミレー国際展がフランス／ヴァンセンヌで開催され、筆者も応募し入選の報に接した。日本支部より入選者のフランス・ツァーの案内を受けたが、他の用事と重なるため見送った。後ほどの知らせでは、日本、欧州を主に約一万点の応募に対して、三五〇点が入選したことが分かった。ことしもまた出品したいと思っている。

このところ、もの書きのほうがお留守になっているため、こちらの方も馬力をかけ、OB諸兄に追いつきたいと考えるこの頃です。

ていることに気がついた。漢詩は起承転結と呼ばれる四つの句から成り立っている。それぞれの句の最初の一語に、私の名前が割りふられているのである。私の名前である池田善行という四文句を右から左に順に並べて、それにつながる形で七言絶句が続いているのである。

たとえば、最後の行を例にとると、「行雲流水、天意を悟る」という句になっている。その前の行には、善という文字を最初の一字において、「善言功德、眞髓を極め」という句になっている。この工夫に気がついた時には、私は思わず唖ってしまった。これは漢詩の達人に違いない。

漢詩の末尾には玄志道人という署名がある。筆者は八十歳ぐらいの白髪の老人に違いないと思った。宅配便の用紙に記入されている差出人の電話番号を手がかりに、直接本人に電話してみた。その結果、次のようなことがわかった。

私と玄志道人とが出あったのは、昨年五月札幌のホテルであったという。たまたま食事の時に一緒になり、二十分ほど会話をかわし、名刺を交換した。そのときの会

